

近江における真宗教団と 基督教団との対決

—— 近江兄弟社調査報告 其一 ——

新 保 満

は し が き

筆者は、1959年に「近江兄弟社」の調査に着手した。調査の途次、予測し得なかった新しい問題が現われた為、研究が延長された。報告書を作製すべき時期に到達しつつ、尚公表をし得ないでいる事は慚愧に堪えない。今後機会を見てその結果を報告し、大方の御教示を仰ぎたいと思う次第である。

筆者は嘗て田舎町における基督教会の事例として、上州安中教会の研究に従事した事があるが（森岡清美編「地方小都市におけるキリスト教会の形成—上州安中教会の構造分析—」後編、日本基督教団宣教研究所1959年5月）、次の研究段階として、より都市化の進行した地域における基督教会の構造を理解すべく、近江八幡教会を採り上げたのである。1955年3月末日現在の滋賀県信徒総数は1,986名（1961年版「日本基督教団年鑑」による。以下現在の教勢に関する引用数字の出典は何れも同じ）と、都道府県単位の信徒総数は全国第18位に留るが、同県内の近江八幡教会は、信徒数799名を数えるのである。日本基督教団に所属する教会で信徒数800名以上を擁するのは、第

第1表 日本基督教団所属信徒数
800名以上の教会

教会名	所在地	信徒数
弘前教会	青森県	899
ロゴス	東京都	2,074
富士見町教会	〃	1,417
霊南坂教会	〃	1,113
田園調布教会	〃	858
銀座教会	〃	851
弓町本郷教会	〃	848
高輪教会	〃	809
名古屋教会	愛知県	1,186
大阪教会	大阪府	808
福岡中部教会	福岡県	1,390

1961年度「教団年鑑」より作製。

1表に掲げた11教会のみである。地域別にみると、その中の7教会が東京に集中し、弘前教会を除いては、何れも人口14万以上の大・中都市に分布している。弘前教会（明治8年設立）は、小都市所在（市街部人口約7万）とはいえ、明治前期よりメソジスト派の努力によって大教会たる實績を示した、いわば日本プロテスタント史上元老格の教会である。然るに、近江八幡教会は、1955年3月31日現在の住民登録によれば、人口僅か14,459人の地域（旧八幡町）に設立されているのである。又、

滋賀県同様大都市も開港地をも含まない群馬県が、養蚕業との関連において明治20年12月現在において958名（全国第5位）の信徒を有し（基督教新聞260号附録）、人口1万当り信徒数においては、実に東京の36人に次ぐ14.3人であったのに対し、滋賀県の信徒数は僅か110名、人口1万人当りにつき1.7人の信徒を擁するに留り、且、当時八幡町には講義所すらなかった事実を考え合せる時、一層興味深い。結論的に云うならば、近江八幡教会は、近江兄弟社（組織体としては明治43年に設立）の発展と共に発展し、現状に於いては信徒の90%以上が同社々員及びその家族によって占められているのである。従って、兄弟社の理解なくしての同教会の分析は不可能である事が判明した。当然、研究対象も同教会から近江兄弟社へと移行せざるを得なかった。近江兄弟社については別稿で詳しく報告したいと考えるが、同社は、平信徒伝道団体として設立され、伝道資金を同社の産業活動によって自給するという、特殊なヴァリュー・オリエンテーションと構造とをもった組織体である。現在日本基督教団に所属する滋賀県下30教会中19教会が、過去の一時期乃至は現在迄も同社と有機的な関係がある事実からも

知られるように、滋賀県の今日の教勢も、同社の伝道に負う所極めて大であった。故に、平信徒伝道団体の問題点を検討するにも、近江のプロテスタント伝道を考えるにも、近江八幡教会の構造を知るにも近江兄弟社とその設立に先き立つ近江伝道の景況を理解しておく事が必要となる。以上の要請から、本稿は、近江兄弟社調査報告の前提知識として、同社設立以前のプロテスタント伝道の展開構造を、明治10年代に焦点を置きつつ素描しようとするものである(故に以下の記述では特に指定しない限り、年号を廢する)。

宗教団体の問題の追求であるから、先ず近江の宗教構成を知らねばならない。身辺の事情から古い統計を入手し得なかったので、「滋賀県史」の掲げる統計を利用するならば、大正年度の近江の宗教構成は第2表に示さ

第2表 滋賀県宗派別宗教機関数(除神社)大正14年1月現在

仏 教			神 道			基 督 教		
宗 派	戸 数	寺院 数	宗 派	戸 数	説教所数	宗 派	戸 数	教会 数
天台宗	7,555	472	天理教	1,858	64		212	11
真言宗	1,031	98	金光教	550	13			
曹洞宗	5,883	213	その他	440	26			
臨済宗	3,897	157						
黄檗宗	293	51						
浄土宗	26,381	517						
時宗	439	31						
真宗	82,635	1,607						
日蓮宗	1,436	37						
融通念仏	42							
計	129,293	3,185	計	2,848	103	計	212	11
一ヶ寺平均 40.5戸			説教所一所平均 27.6戸			一所平均 19.3戸		

「滋賀県史」第4巻 p. 406より引用。

れる通り、真宗寺院が全仏教寺院の50.5%、全仏教戸数の65.4%という圧倒的な比重を占めている。更に、第3表によって同派の分派構成をみるならば、大谷派と本願寺派が相対峙し、外の小宗派が之を取り巻く衛星群を

形成しつつ近江の真宗教団（註）は構成されているのである。此の状況は、明治期においても大差なかったと見て差支えないであろう。

周知の如く、徳川幕府の宗教政策によって「民衆監視」の役割を委托せしめられ、準国教的特権の座に馴れた仏教々団は、当然墮落の道を辿った（辻善之助、「日本仏教史」第10巻、p. 404—490）。明治政府が巻き起した廃仏毀釈の嵐には、一面、従来の仏教々団の在り方に対する民衆の不満が反映されていたとみるべきであろう。此の事実は、斯教の覚醒を促さずにはおかなかった。然し、上からの信仰強制は、遂に、組織化された仏教反対運動に迄昂められていなかった民衆の心をつなぎとめ得ず、民衆は嵐の収まるにつれて、再び、寺院の「檀家」として再編成されて行ったのである。一時的な混乱の去った後も、仏教々団は、残された課題として、教理の近代的再編成と教団の近代化を志向したが、結果的には、ヒエラルヒックな構造をもつ各教団・教派の最上層を構成する一部知識人の近代化に留り、教団自体の構造改革は実質的には殆んど行われぬ儘、黙んで終わった。

仮令一時的にせよ、直接的に仏教々団に近代化を促したのは、切支丹禁制の高札撤去であり、国家権力と仏教々団、民衆と仏教々団との間隙を縫

第3表 真宗々派別寺院数

宗 派 別	寺 院 数
真宗大谷派	790
浄土真宗本願寺派	609
真宗仏光寺派	141
真宗木辺派	47
真宗興聖寺派	8
真宗高田派	3
計	1,597

「滋賀県統計書」昭和32年、p. 368。

全体的なかかる動きの中に殊に戦闘的な態勢をとったのは真宗教団であった。従って、真宗教団が既述の如き大きな比重を占める近江の基督教伝道は、真宗教団と基督教団との対決と

って進出した、西欧文明を背後に担う基督教団であった。幕藩時代の準国教的地位を忘れかねた仏教々団は、西欧文明との接触によって触発された民衆の素朴なナショナリズムを背景に、基督教の排撃によって国家及び民衆との間隙を埋めようと志向したのである（「明治文化史」〔宗教篇〕洋々社、p. 189）。

して理解すべきであると考えられる。その観点から、真宗大谷派の機関紙「開導新聞」（週刊。13年7月1日より16年4月17日まで400号を発刊。）と基督教界の残存資料とを対照させつつ、真宗教団の反基督教体制の中に基督教団が形成されてゆく過程を分析する。

論述の順序は、先ず真宗教団の反基督教体制を略述し、その間を縫って基督教団が展開した過程を概観する（第1節）。次いで、真宗教団の反基督教運動の種類と方法とを検討し、該反対運動の効果として、基督教団がどの地域のどの社会成層に如何なる方法で展開したか（或は、それ以外にはなり得なかったか）を瞥見する（第2節）。進んで「宗教」教団としての両者が激突した仕方を知る為に、両教団の志向価値の実現手段の効果を「講演会」（基督教会の「伝道集会」を含む）という一点に絞って分析し（第3節）、最後に、両教団の攻防を可能ならしめた個々の条件について記述する（第4節）。

注：本稿では、「仏教々団」の下部単位として「真宗教団」を考え、各分派の各々を「教派」と呼ぶ。具体的には、真宗大谷派の事例によりつつ、真宗教団の動勢を推測する。我国においては、広義の「基督教会」が絶対小教派であるので、カトリック及びプロテスタント全体を夫々「教団」と考え、その一分派なる各派を「教派」と呼ぶ。更に、会堂を有し、聖職と信徒とからなる局地的団体を狭義の「教会」と名附ける。以下、「教派」以上の段階のものは、特に指定しない限り、本稿では「教会」とは呼ばない事にする。本稿では、主として組合派の事例を中心として、基督教団の展開構造を考察する。

1

真宗大谷派の本山が、「開導新聞」を通じて、その傘下の末寺僧侶及び有力門徒に倦む事なく繰返した主張は、要するに門徒を基督教団の進出より防禦する事が「嚴證法規」であり（例えば開導新聞22号を参照）、「従い演説者流が（引用者注：基督教を）排撃せずとも、学者・社会が（同上：仏教を）眞實して呉れずとも、吾党の同胞諸君が一致し、彼が邪を破し、吾が正を

頭」わす事が仏門に連る者の使命であるというのだった (Opc. 110号)。此の大谷派の問題意識は、とりもなおさず真宗教団の問題意識であるとして、以下、この価値志向の下に編成されてゆく真宗教団の反基督教体制について略述しておく。

真宗教団内の大教派では、本山の学僧に基督教の教理を専門的に研究せしめて、真宗の立場から問題点を整理し、小冊子を編み、以て同教派内の反基督教々育資料とした (Opc. 96号, 106号 etc.)。本山の意を体した各地別院では、傘下の末寺を集めて定期的に基督教々理の講習及び具体的な新教排撃方法の研究会を開き、一段下の段階へ本山の意図を伝達した (Opc. 96)。各末寺僧侶が寺門徒団を同様の方法で教育した事は疑を容れぬ。此のように、本山の意志は、別院・末寺を経由して各門徒に下降し、基督教団との接触面における出来事は更に逆の方向に上昇して本山に「上申」され、再び本山の意志が「回答」として下降してくる (Opc. 186号, 305号 etc.)。

以上のような垂直的な体制に対して、次に水平的・空間的な反基督教体制についてみよう。近江の仏教々団の地域的な存在形態は、Ⅰ. 集落社会が真宗教団の門徒のみより構成される場合と、Ⅱ. 複数の教団・教派が併

第4表 東浅井郡中野村門徒寺院別所属

寺院名	宗 派	所在村名	門徒数	員 数
了福寺	大谷派	中野村	34	150
本徳寺	〃	〃	25	90
覚法寺	〃	〃	15	63
専宗寺	〃	〃	30	?
頓正寺	〃	三河村	?	?
願正寺	〃	留 村	?	?
計			117	414

「開導新聞」243号より複製。

野村等であるが (第4表参照)、恐らくは中野村周辺の集落社会も之と似た構成をもって、寺門徒団の聯合による地域門徒団が成立していたのであ

列的に存在する場合とがあり、

Ⅰは理論的には更にA. 「一村一寺」の場合と、B. 一集落社会が複数の寺門徒団より構成される場合とに分れる。開導新聞の記事のみでは、近江に関する限りの事例はみられないが、安芸・三河等には多く存在した。

Bの事例は、例えば東浅井郡中

る。何れにせよ、I の場合は、集落社会に真宗教団と対立する集団が形成され、乃至は形成される可能性が醸成されて来た時、末寺を核に寺門徒団が団結し、「門徒」という共属意識に支えられて、地域門徒団を単位とする抵抗体制が確立されるのであった。又、周辺の集落社会が、I に近い構成をもつ場合、I の構成をもつ特定集落社会を超えた広い空間に、門徒団の再編成が行われるのである。

此の反基督教体制の中に、基督教団は、どのような形で展開しえたか。管見に入った残存文献で追求しうる限りでは、藩命によって「洋法医術」研鑽の為、横浜在留のドクトル・ヘボンに師事した彦根藩医中島宗達（養継子）が、宣教師達の感化を受けて、明治5年、東京より故郷に漢訳聖書及び小冊子を送った（七一雑報4—25）のが近江プロテスタント伝道の嚆矢である。同じ頃、代々町医として著名な樋口三郎は、大阪で修業中に基督教に接した（「彦根教会史」p.17. 以下「彦史」と略す）という。年代は明らかではないが樋口は6、7年頃帰彦して職人町に開業した。7年には神戸在留宣教師ダニエル・グリーンが、後に北海道日高郡浦河に「赤心社」の創立者の一人となった鈴木清を伴い、彦根に樋口を訪れて十数名の聴衆に一場の講演を試みた（七一雑報4—25）。「彦史」によれば此の席に連った者は、樋口宅で開かれていた「天道溯源」輪読会の常連であったと推測される（Opc.p. 2）。8年10月、中島は、養父の訃に接して帰彦、家業を襲う一方、樋口と意気投合して、医学知識普及の名目を以て9年4月に「医学会社」を設立した。彼等は、眼科医として令名あった京都在住の医療宣教師、W・テラーを特別会員に加え、毎月一度、彼の治療と基督教についての講演とを依頼した。会場には番町にある伊井家創立「衆議社」を充てた。会衆は、毎回4、50名を下らなかったと謂う（Opc. p. 5）。

中島・樋口等は、家業の性質上遠隔地にも知人が多いので、伝道にはこの知人網を利用した。一例を挙げるならば9年12月の冬季休業を利用して同志社神学生森田・川辺の両名が彦根伝道に赴いた際、樋口は蒲生郡八日市の島崎吉三郎、市辺の広瀬又治に添書を与えて八日市に伝道の足がかり

を作った。之が後の八日市教会に迄形成されてゆくのである。

10年2月より同志社神学生小崎弘道が彦根を月1回訪問、須田明忠は八日市を担当する事になった。須田は、聖書販売旁々、八幡にも集会を開いた。同年夏の夏季伝道には、求道者の費用分担で小崎が2ヶ月間彦根に定住し、小学校を借りて週3度の聖書講義をした。その後、小崎は毎週又は隔週に彦根を訪問して信徒の養成に努力した（「小崎全集」第2巻 p.32—33）。同年2月には、樋口・中島が中心となって同志18名が「明十社」を結成し、「天道溯源」を輪読し（「彦史」p.6）、「日曜日毎には集会して、互いに聖書を読み、神に祈禱し、又、金を集めて勸善の入用に供給す」る事となった（七一雑報 2—51）。此の記事より察するに、「医学会社」は、小崎の夏季伝道前後に解散していたものであろう。

同じ頃、彦根グループと緊密な関係にあった八日市の信徒の間にも信仰の昂まりが見られた模様で（七一雑報 3—38）、未受洗者達の「宣教」活動に依えて、伝道者達の間にも、「実に刈り入れの秋なれば、到る処、どことなく留りて働らき度思うところのみなり」（Opc. 3—28）という気運が漲って来た。

一方、11年に、長浜の藤井太三郎・杉本吉士は、「洋法医術」の令名高き中島を慕って彦根に診断を乞うた。中島の人格に感銘した両名は、数名の同志と相謀って「養親会」を設立、此の会より幾分の謝儀を呈して彼を月2回長浜に招いた（「長浜教会史」p.5. 以下「長史」と略称.）。中島は安藤某宅に出張所を設けて診療にあたり、其の後、衛生講話や宗教の話をし、10月末には前出テラーを招いて診療後に伝道説教をなさしめた（Opc. pp. 4—5）。更に、11月には本間重慶を伴い、樋口も月2回出張する事となったが、安藤某は「親戚の迫害」に耐えかねて、集会を断るに至った。止むを得ず、求道者達は方々伝手を求めて南船木町田辺木六郎の奥座敷を借り受け、聖書研究を再開したのである。中島等の連絡で大阪のデ・フォレストが毎水曜日に出張し、須田明忠も此の群を養った（Opc. p.6）。

上述のように、未受洗者による宣教活動・同志社神学生による伝道・医

療宣教師を含む宣教師の応援という三位一体の協力により、困難な中にも伝道が進捗し、12年6月4日には、衆議社において男9名女3名計12名が新島襄より受洗24戈の本間重慶が按手礼と牧師任職式を経て此処に彦根教会が設立された。翌5日には、八日市の仮会堂で同様の手続により、男女6名がテラーより受洗、八日市教会が誕生した。此の日、広瀬又治は八幡の小学校長野間憲吉宅に到り、数人の集会を開いた。以降、八幡の伝道は、須田明忠が担当した。

12年夏頃には、日野に数名の求道者が起った模様であるが、伝道の経路は詳らかではない。恐らく、八日市を拠点とした伝道が実を結んだものであろう（七一雑報4—43）。同町に菓舗を営む山田富蔵が専ら斡旋の労をとり、八日市及び同志社より応援したが永続しなかった（近松文三郎、「最初に近江に來た基督教の事ども」II「湖畔の声」（以下「声」と略称）昭和11年10月号、p.35）。

既述の彦根グループを中心とした伝道戦線の拡大とは独立に、10年頃には県都大津にも偶然の機会から福音の種が播かれることとなった。八幡町寺内北末の納屋嘉兵衛長男で、国学者西川吉輔の門下生高田義甫^{よしなみ}は、大森藩最上家に勤仕中、同藩佐幕派の首領宮田某を同志3人と共に殺害した。その旧罪が発覚して、高田は、明治9年3月、大津裁判所より終身懲役の判決を受け、下獄した。獄内では特別待遇を受け、同人の発意で囚人を対象とする小学校が設立され、彼は校長として囚人教化事業に専身した。新島襄の協力者山本覚馬は、高田の噂を聞いて、指名で「天道溯源」を差入れた。高田は一読、感激して之を修身の教材とし、日々囚人に講演したのである。新島は高田の活動とタイアップして、「修身講話」の名目で金森通倫を毎日雇い、大津監獄に派遣した（近松 Opc. p.34）。為に、囚人の素行大いに改まり、県もその功を多として、10年9月22日、特令を以て高田は放免せられた（近松文三郎、「高田義甫」p.113）。高田は、現大津市下馬場町に一家を賃して免囚保護事業として活版印刷業を始め、「勸善社」と号した。高田の事業に対して県から300円の補助金があった外、彼への好意として県庁・兵營の印刷物は一切同社に下命となった（Opc. pp. 116—117）。ほ

ほぼ時を同じうして高田は「桶屋町柴屋町東へ入る南側に説教所を設け、伝道の拳に参加」した (Op.c.127)。即ち、毎日曜、同志社より、宮川経輝・金森通倫・須田明忠等を招いて説教せしめたのである。殊に須田は、新島の意を体し、卒業後高田の事業後援の為に派遣され勸善社内にて起居したが、後、待遇の点に不満を抱き、八日市教会に転じた。

初め高田の事業を翼賛した県令範手田安定は「敬神家」で、高田が基督教の伝道に協力している事実を知って圧迫を加え、12年夏には彼の事業は廃止の止むなきに至った (Op.c.p.124)。説教所も浜通りに移されたが、それは、高田が設立した説教所の来会者で弁護士である中山勘三法律事務所であった。新進気鋭の法律家には県庁も手の施しようなく、日曜の集会はその後も暫く続いたが、やがて消滅し、存続期間が短かった為もあって高田を含めて、1人の受洗者をも見なかった。10年代の終りに、京都四条教会が天津伝道を試みたようであるが、詳細は不明である。

以上が、10年代前半の教勢であるが、後半を先ず長浜の景況からみてみよう。14年7月は8名が初穂となり、同年11月には「初めて門戸を放ちて演説会を開」き (『長史』p.11)、16年2月に新島を迎え、同年4月には堀貞一が新島に推挙されて同地を担当、17年9月には定住伝道を開始した (Op.c.p.11)。18年5月に、第4回福音同盟大親睦会のリバイバルの余波を受けて教会設立の気運が昂まり、6月10日には、男11名女9名計20名の会員を擁して教会設立式を挙げた。

八日市教会は、14年に須田が辞して一時無牧となったが、15年夏には堀貞一が夏季伝道で定住し、八幡・日野にも足跡を残した (菅井吉郎、「堀貞一生先」p.64)。17年には、原忠美が夏季伝道に定住し、同じく八幡から天津に迄伝道した。然し、受洗者少く中心的人物が早逝し又他出してその後無牧の儘放置され、21年8月10日、同教会の旧伝道地八幡に八幡講義所が設立されるや、伝道会社の命によって11月10日に同講義所に吸収されてしまった (『近江八幡キリスト教会史』p.3)。

これら二つの教会を生み出した彦根教会も、16年6月に本間重慶が辞任

した後は、後継者なく、結局、長浜の堀貞一と、同志社の神学生が、彦根・八幡の集会を支えたのである。伝道の本拠八日市の空中分解によって、日野の群も当然消滅した。

20年代の教勢の消長に就いては、第4表をもって記述に替えるが、地域的には大津を中心とした伝道が主軸となり、斯教の主勢力は西に移転した様子が窺われる。彦根教会の如き、20年代の終りには、礼拝出席者3—5

第5表 明治20年代新伝道地一覧

地 名	年月日	伝道経路	備 考
大津	20.12.17	京都四条教会	四条教会伝道地より伝道会社直属となる。
大田	24 夏	同志社	同志社神学生により伝道開始。
今津	23	監督派	監督派伝道地に指定されるが自然消滅。
草津	23 春	同志社	同志社神学生により伝道開始。同年9月講義所設置。25年、14名受洗。
瀬田	25. 3	大津講義所	伝道所設置。
守山	25.	草津講義所	伝道開始。
水口	17	同志社	平信徒の移住により伝道開始。23年7月講義所設置。29年2月11日献堂式。
三雲	25.10.30	京都宣教師	基督教演説会を開く。
米原	26.10	彦根教会	宇田川竹熊伝道す。
八日市	27. 2. 19	八幡教会	再伝道開始。

「基督教新聞」より作製。

名、祈禱会1—2名、「時とすると牧師一人という事もあった」（「彦史」p.50）という程に衰えた。長浜とて例外ではなく（「長史」p. 14）、八日市教会は解消し、八日市教会より産声を挙げたばかりの八幡講義所も25年12月には伝道会社から解散の勧告を受ける有様であった（「近江八幡キリスト教会50年史」p. 8）。

以上が基督教団展開の概要であるが、偶然的な機会に他地で斯教に接して帰郷した未受洗者の求道生活兼「伝道」が主軸をなし、それに伝道者が援助して之を育成するという形態が一般的であった。信徒の育成・伝道の継続の如きも、長い伝統を持つ真宗教団の反基督教体制の完備に比して可

成遜色があったと思われる。此等の点の構造的理解は後節に譲る。

2

真宗教団の反基督教運動は、未組織の偶発的な暴動から、集落社会の再編成に至る、高度に組織化された段階のもの迄、様々であった。反対運動の対象は、Ⅰ. 信徒乃至求道者個人、Ⅱ. その家族員、Ⅲ. 教会であった。

反基督教運動は、Ⅰ. 門徒 (layman) によるものと、Ⅱ. 寺院 (professional evangelical agency) によるものとに大別される。Ⅰは、A. 責任の所在を明示しない個人又は偶然的・乃至組織された集団による反対運動と、B. 之を明示したものとに分けられる。Aは1. 子供等を使喚して集会の妨害をせしむるもの (開導新聞211号 etc.)、2. 徒党を組んで教会堂を破壊する等の直接的攻撃 (「長史」p. 25)、3. 例えば町民に、匿名で教会堂への放火を予告して間接的に基督教団を集落社会から疎隔しようとするもの (「彦史」p. 15) 等とに細分される。之等の活動の背後には地域門徒団が控え、教団はその事実を隠そうとはしなかったようである (開導新聞243等を参照)。

B. は、1. 個人 (Op. 233号)、若しくは 2. 組織された「防禦家」が公然と反対運動を展開するもので、長浜の如き、大通寺の門徒が、「郡長・戸長等の尽力にて十余名の耶蘇教防禦員を設け、それぞれ手を配」ったのである (Op. 217号、下線引用者)。此处で、門徒団が国家権力と提携している点は重要である。

Ⅱは、A. 寺院が行うものと、B. 寺院が指導して、門徒を再編成する場合とに分けられる。Aは、1. 一寺の僧侶が単独で行うもの (Op. 352号 etc.) と、2. 複数の寺院の提携によるものに細分される。2は、a. 真宗教団の末寺間の提携によるもの (第4表を見よ) と、b. 超教派的な提携とがあった。2 b については、草津の事例として以下の記録がある。超教派

的な提携によって各寺院僧侶は基督教の求道者を威嚇し、之に聞かざれば日曜に要談を設け、或は他に誘引して教会に参集するを得ざらしめたのである（基督教新聞487号）。

Bは、1. 真宗教団のみによる再編成と、2. 超教派の仏教寺院（真宗寺院を含む）乃至は氏神で講を作って反基督教の盟約を結ばしめるものがあった（Op. 144号 etc.）。1はa. 一村一寺の場合とb. 複数の寺門徒団が地域門徒団として再編成される場合とがある。具体例は紙幅の関係上割愛するが、盟約書正副2通を作製し、各戸主署名捺印の上、正本を本山へ、副本を各末寺に提出して教団の権威の再確認が行われた。1、2に共通した盟約の内容は、i 基督教の説教演説を聞かぬは勿論、場処をも提供せず、用談以外は伝道者・信徒と接触せざる事、ii 之を冒す者は、「家主及び家族は勿論、奴僕の種類に至る迄」（Op. 144号 etc.）集落社会より疎隔さるべき事であった。結論的に云えば、1の如き地域（主として村落地域）においては此の盟約は極めて効果的であった。然し、2の場合は、盟約加入戸に対する規制力が1の場合程強くないので、基督教の進出を食いとめることが出来なかった。殊に異分子を多く含む「都市」においては、此の傾向が顕著に観察された。

即ち、基督教団は、I地域的には「都市」的性格の濃厚な地域にのみ進出し得た。勿論、牧師は村落地域を等閑視したのではなく、「其困難実の名状し難き」程の努力を払って伝道し（「彦史」pp.39~40, 七一雑報 4-43 etc.）、信徒も之を扶けたのであるが（「彦史」ibid.）、その労は全然酬いられなかったのである。

II. 社会成層の面では、A. 地元民と、B. 移住者とに分けて考えねばならない。Aは、その原因を確かめるだけの資料を入手し得なかったが、中層以下に分布した。八日市教会は、教師・小売商及びその家族が中心であり（近松資料「声」、昭和11年9月号、pp. 32~33）、彦根も2、3の医師を加えて同様の構成を示した。長浜も上層でなかった事を確かめてある。八幡亦然り。然し、「新知識」を求めるに熱心な人々であった事は共通している。

（基督教新聞517号、「彦史」p. 23）。

B. 移住者は、官吏、成長しつつあった金融機関・大企業の末端の担い手が主であった。彼等の刺戟により、暫く伝道の杜絶し、潜伏していた古い信徒が復活して教勢の再興を見たり（水口）、沈滞していた集会が中興したり（大津）した。特に当時の官吏は、新任地で忠実に教会生活を守ったが、転勤が頻繁だったので彼等の一進一退により教勢が左右される弱少教会は絶無ではなかった（基督教新聞 510号）。

以上を要約するに、基督教は、中層の進歩的分子によって受けとめられたのであった。移住者が常に刺戟を与える立場に立つのは、彼等が、地域社会の伝統的な成員からみれば一種のアウト・カーストであり、社会関係の拘束が比較的疎である為であった。地元民の場合、家の框が移住者よりも強く絡んで来て、問題を複雑にした。以下、Ⅲ. として、教会の集会に家の框がどのように絡んで来るかについて若干触れる。

Ⅲは、A. 家の框が伝道の疎害要因になる場合と、B. 促進要因になる場合とに分けて考えられる。Aは、1. 基督教会が物理的に接触した家と、2. 教団の成員として乃至は求道者として教団に接触する者の家とに分けられる。1は、長浜等で顕著であったが、集会の為め家を借りる事が困難だった際の家の框の絡み合いである（「長史」p. 26 etc.）。即ち、単に家主の一存だけで拒否するのではなく、「親類の圧迫」（Op.c. p. 7）に屈して拒否せざるを得ない場合があった。而も、家主のみならず、親類の家々も門徒の編成した「十余名の耶蘇防禦員」の監視下におかれたのである。家が借りられぬ為伝道が伸び悩んだ事は言を俟たない。2は、a. 教団が求道者に接近しようとする場合と、b. 教団に求道者が接近しようとする際の家の框との葛藤とがある。a. については明十社の事例を見るべきであろう。後述の如き高いモラルをもった明十社も、最終的に教会を設立する案を指導者から提出されるや、1と同様の社会的圧力が家関係を通じて及んで来るのを恐れ、18名のメンバーは、7名を除いて離脱してしまった。b については、枚挙に遑がないが、同じ長浜の事例では、家の成員がス

教に接しようとする場合、「屢々受洗志願者を起せども、家内の迫害に庄せられた」のである（基督教新聞277号）。之は、僧侶が求道者の家長・親類等を説いて、「日曜日には嚴重監視せしめ」た結果に外ならない（「長史」p.26）。

B、基督教が家に滲透し得るや否やを大きく左右したのは、之を受けとめる者が家の中において占める座によったのである。彦根教会の事例では、中島宗達妻静子（「信仰卅年基督者列伝」）、三谷岩吉妻いと（「彦史」p. 25）、速水正伯妻タケ（Op.c. p.26）は何れも「夫の感化」によって信仰を起した。此の際、「夫」は何れも家長であった。樋口二郎の如き、養母・妻・長男を彼と同時に受洗せしむる事に成功した。つまり、家長が導入者となった場合は、極めて容易に一家が信徒になり得たのである。又、家は、信仰の保護框として、外部社会の圧迫から、成員の信仰を護った。尚、信仰の導入者と家の座との関係については、森岡編前掲書後篇の拙稿を参照して下されば幸である。

上述の如く、外部社会からの圧力により、教団は移住者層と、信徒の家の成員に伝道するしかなく、長浜に典型的に観察されたように、設立時の20名の会員は移住者の家族を含む家族にそれぞれ分属していたのである。之は、彦根・八日市の場合も同じ（「彦史」p. 51）。結局、真宗教団の反基督教体制が奏功して、基督教団は地域社会の中に孤立せしめられ、その規模の拡大は、内部における「再生産」と、地域社会外部からの「空輸」による以外はなかった。

3

基督教の対外部社会への直接的宣教が、毎週の説教・伝道集会及び講演会によって展開されたのに対抗して、真宗教団も盛に講演会を開いた。近江の如く、真宗の布教網が完備している地域では、本山から講師を派遣されれば足りたが、真宗寺院の分布が疎なる地域には、「仏教の弘通に種々な障碍を与うるゆえ」、「説教所を数ヶ所増置して、飽迄も折伏退治の功を

奏せん」と決したのである（開導新聞24号）。即ち真宗教団の場合、基督教の進出に覚醒を促され、「退いて守るは進んで取るに如かず。我々は防禦の城廓をおしひろめて進襲の陣營をなす」（Opc. ibid.）という、従来の伝統固守から、積極的な宣教態勢への教団の再編成志向に迄昂められたのである。

対基督教論争も、I. 両教団の上層部の会談にあっては、例えば15年夏、M・L・ゴルドン及びジョセフ・クックが本願寺派の赤松教正と交した論争の如く、冷静且論理的にして宗教そのものの根本問題に関するものであった（Opc. 264）。

II. 一般大衆を対象とする仏教演説会には2種類あり、A. 過去の伝統を受けついで「無常の説」、「罪の説」、「三法印の説」等教理の釈義による門徒の信仰訓練を主眼とするものもあった（Opc. 115号）。然し、基督教の進出が契機となって新たに強調された戦術であるからして、B. 多くは直接的に基督教を攻撃し、その帰依すべからざる以所を説いて、門徒の該教への回心防禦を意図するものであった。

Bの演説会主催の方法には2種類ある。1. 真宗教団が主催するものと、2. 真宗教団の框を超えて、地域社会の寺院が協力して講師を招くものである。2の場合も講師は、多くの事例が「開導新聞」に報ぜられている事実より推して、本山で組織的に基督教々理を研究し、最も積極的且組織的な反基督教体制をとる真宗教団から招かれる事が多かったようである。

演説の内容は、基督教攻撃の熱意に燃える演説者が、時としては飲酒の上登壇する等の事実からも予想されるように（「長史」p. 24）、極めて攻撃的であった。攻撃の内容は、i 真宗教団の観点から論理的に矛盾と思われる基督教の教理を衝く場合（開導新聞, 106, 305号 etc.）と、ii 基督教団に対する事実無根の中傷とがあった。iiの一例をあげるならば、「基督教徒は国賊なりと叫び、人面獣心なりと罵しり」（「長史」p. 24）、「基督教の医師は毒を盛るから招く事は出来ない。耶蘇の醬油は買うてはならぬ。必ず三年後には死すべし」等と教えたのである。勿論散発的な講演会だけではなく、「耶蘇防禦員」の指導等もあって、基督教徒は生業に支障を来し、困

却した (Opc. ibid.)。

然し、仏教講演会は、寺院側の期待にもかかわらず、珍奇な演題を掲げるに非ずば会衆を集め得ず (水口、八幡の事例)、又、時には屋に基督教を攻撃した弁士が夜には喰逃げしたり、夜逃げしたりするという失態を演じた為 (Opc. p. 24)、一般有識者の輿感を買い、此の方法では真宗教団も一般の人心をつなぎとめ得なかったとみるべきであろう。

明治10年代の基督教演説会については、場処・日時の外具体的な記載がないため、20年代の資料より検討する。

基督教演説会の聴衆には3種類あって、I. は講演者の論旨に聴かんとするもの、II. は積極的に集会の妨害に出掛けて来る手合、III. は弥次馬である。近江の場合、上州に比してI 少く II が極めて多かった事実は、之迄の叙述より容易に理解出来る。

26年6月10日に水口の万屋旅館で行われた「弘教者フオンデス」の演説会には、約100名の会衆を得た。「聴衆の態度甚だ宜敷、弁士の変る毎に拍手せし而已にて……終始静座沈黙して聴問した」のであった (基督教新聞517号)。聴衆は、「多くは青年者に非ざれば中等以上の実業者」であった (Opc. ibid.)。時代は可成下るが、34年8月1日より5日にかけて彦根で行われた廿世紀大挙伝道は、25名の求道者を得、19名が牧師館の門を叩いた。「主な人は高等学校・専門学校・大学の学生で、暑中休暇で帰って来ている人々であった」(「彦史」p. 52)。I が地域社会の「進歩的」分子だったのは、弁士が大部分外人宣教師乃至は大都市で欧米風の教育を受けた伝道師その他同志社等の大学関係者であったため、どうしても聴衆も之を理解しうるものに限られたからである。彼等の中には、やがて大都市生活者の中に編成される途上にあるものが多かった為、仮令一時的に教会に迄惹きつけられたとしても、教会支持層を形成するには至らなかった。

II は、「緇流の徒に非れば白髪禿頭の老人」多く、彼等が集会に参加する時、「会場はノーノー、ヒヤヒヤの声に溢れ、其喧噪云はん方なし」(基督教新聞517号) という状態だった。26年3月に、彦根教会が計画して彦根

議事堂で開かれた廃娼大演説会には、「貸座敷の依頼を受けたるゴロツキ及金亀教校（引用者註：天台宗）と称する仏教学校の僧生輩」が大挙して押しかけ、「暴評を加えて妨害を試み」たのである（Op. 505号）。彦根の事例の如く業者の直接的な経済的利害を伴った妨害もあろうが、一般の基督教講演会には、間接的な利害関係をもつ仏教々団教職者が、檀徒を動員して妨害の為に押しかけたものとみてよい。

かくして、演説会を開けばⅠに属する者少くⅡ多く、折角集った者は教会の形成層に加わることなく洩れてしまう「浮動層」であり、結論的には此の方法で教会が地域社会に根を下すことは困難だったのである。

〔補論〕

之は真宗教団と関係ありと推測されるが確められなかったので本論には採り入れなかったが、仏基雙方の宣教活動における外人の役割について簡単にみておきたい。近江における初期の伝道が、各地の未受洗者乃至信徒と宣教師と同志社神学生によって遂行された事実は既に本論で指摘したが、宣教師の説教の如き、言語の関係もあって、幼稚極まるものであった。例えば、11年11月に医療宣教師テラーが長浜の求道者に対して試みた講話の大意が「長史」p. 5に収録されているが、以下、本冊子より全文を引用する。

「私は今日眼病を数人治療し、必ず全快すと確信す。私し時計あります。此の時計を壊した時は何に行きて直すべきか。時計店に持参するであらう。御互人間は、天父の造りたる者なれば、今日只今より真正なる人となるよう天父に頼め。」

所で、以上の説教そのものが人心をつなぎとめたとは考えにくい。むしろ集る者は好奇心に発し、之によって帰依した者は、彼等の人格に傾倒した為である。人々をして彼の「説教」に傾聴せしめた所以は、彼が「西洋人」であった為であらう。

同じ現象は仏教側にも見られた。26年4月に、英オルゴッドなる者、仏教に加担し基督教を排撃すと「仏教演説会」を開いたが、彼の行く処満員ならざるはなかった（基督教新聞509号）。「本山より末寺に至る僧侶輩、恰も百万の援軍を迎えた如く、釈迦如来の再来の如く崇め奉りて、其歓待の慇懃懇切、期待の状、殆んど言語に絶」したという（「長史」p. 37）。然し、基督教徒にしてみれば、オルゴッドの基督教批判は浅薄にして、仏教にも半可通であり、基督教をも仏教をも俱に深く知らざるものと映ったようである（基督教新聞509号）。

結局、仏・基督雙方共、当時としては稀少価値をもつ西洋人を尊重し、彼等の權威を借りて折伏せんことを期待、結果的には自分達の側だけで感心している事が多かった。

4

前節で瞥見したように、真宗教団・基督教団の雙方共、教団の志向価値実現の直接的な手段たる宣教活動のみでは、所期の成果を収め得なかった。然し、その不成功や、「別して僧徒の品行と熱心との両点に至っては、人をして赫顔に堪へざらしなむるものなきに非ず」（開導新聞86号）と教団内部ですら反省せざるを得なかった末端部の現実にもかかわらず、尚、「耶蘇は切られてもいや」（Op. 115号）という「耶蘇嫌い」を中核として、真宗教団は、強力な反基督教運動を展開し得た。基督教団の方でも、上述の、殆んど伝道不可能にみえる環境にあつて、尚若干の進出をみた。以下、此の事実を支える条件を夫れ々々の側について考察する。

真宗教団が反基督教運動を展開するに當って、極めて容易に民衆を再編成しえたのは、徳川幕府が鎖国政策の支柱として、強力且長期間にわたつて培つて来た反切支丹感情及び、之とウラハラの関係にあるナショナリズムを利用した為に外ならない。真宗教団による反基督教運動の問題意識は、前に述べた如く「破邪顯正」であつて、その邪とは、第1に「残忍暴虐の

悪徳」であり、第2に「掠国奪地の詭術」であった (Op.c. 121号)。此の論理からして、「現に我国に在留する所の耶蘇教師等は皆外国政府の間諜に非ざれば必ずその政府の太鼓持」であり、「日本人にして其奴隸となりて此宗教弘通に用施する奴輩」は、「言語道断、国を売るの奸賊」(Op.c. ibid. 尚以上は18年4月、京都で開かれた交詢社の演説会に際し配布された印刷物より抜粋したもの。真宗教団は之に全面的に賛同しているので引用した。)なのであった。従って、基督教に回心した仏教徒の如きは、「私慾主義の、人皮獣心よりも劣りたる木石に斉き輩」(Op.c. 248号)とされたのは蓋し当然である。

近江の事例に戻るならば、15年1月21日、伊香郡木ノ本駅妙楽寺に於いて「外教防禦の爲め」仏教演説会が開かれた際、伊香郡長は「殊の外随喜」して祝辞を述べた。曰く、

「夫れ国家を災害するは耶蘇教より大なるはなく、人心を蠱惑するも亦耶蘇教より甚だしきはなし」(Op.c. 121号)

と。此処には、教団側と同じ問題意識がみられるが、それは、民衆の潜在的な感情とみて誤らないであろう。真宗教団は、従って、新たに此の段階迄問題意識を育成する必要はなく、潜在的なエネルギーを顕在化せしめれば足りた。こうした底辺の広い社会的基盤を再編成の対象として期待する所に、近江における真宗教団の反基督教運動は奏功したのである。

之に反して基督教団は、幾つかの条件に支えられて、新しく集団を形成する所から出発しなければならなかった。第1の条件とは、基督教が「新知識」を提供した事である。a. 基督教は、高い落差を持つ西洋文明を背後に背負って立ち現われた。彦根教会では、既述の如く、「宣教」活動が「洋式医術」との抱き合せで行われた。中島・樋口等の「医学会社」は、「当時としては頗る耳新しいもの」であって、多くの聴衆の好奇心を満足せしめた(「彦史」p. 3)。然し、此処には、西欧文明と宗教とが混同される危険性があった。b. 基督教そのものが、伝統的に異った価値体系である為に、視野の広い「進歩的」分子は其の点により深く吸引された。高田義甫の如き、「真率にして自由の精神に富み、潔白にして博愛の主義を旨

とする」斯教に感激して回心したのは(近松 Opc. 127), 数多い事例の一つである。但し、此の場合、理解の仕方に問題があった。洋を両分する、伝統的な且相互に異質的な価値体系を理解するには、どうしても在来の既成概念で類推する以外はなかった。其の為、宣教師達が彼等の信仰そのままを日本人に完全に理解せしめたか否かは、改めて検討すべき問題となる。然し、尠くとも、「新知識」が基督教団形成の重要なモーメントであった事は疑いを容れぬ。

第2は、斯教に回心した者の高い人格が、彼に接触する者をして求道又は回心に至らしめることである。中島宗達の如きは、「洋式医術」を求めてヘボンに就き、その人格に傾倒して求道した。帰彦しては、人々は嘗て中島の歩んだと同じ道の中島そのものから示された。速水正伯(「彦史」p. 25), 岩崎春造(「信仰卅年基督者列伝」)等は、何れも中島や樋口の感化によって求道を開始した人々である。然し、それだけでは集団形成のモーメントとはなっても、集団の志向価値実現には不充分で、成員の質的向上を図る教育機能が集団内で十全に行われる必要があった。10年代初期の集会は、彦根教会の場合、水曜は中島の衛生講話に引き続いて、樋口・本間重慶の「説教」があった。牧師が24才の白面郎であった関係もあろうが、毎週平信徒が「説教」していた事は注目されてよい。日曜は朝礼拝、夜伝道集会が開かれる。礼拝といっても祈禱と聖書輪読だけで、説教はなかったものらしい(「彦史」pp. 12~13)。之では信仰の訓練が充分とはいえず、皆が皆「基督教の真髓に触れた訳ではなく」、「中島・樋口の兩人の如き人格者の信仰さるものならば決して間違ったものではあるまいとの信条を以て信仰」することとなる(Opc. p. 25)。

第3に、基督教団に対する外部社会の圧力は集団の外縁を明確にしたが。直接・間接的圧力の強度と、之を受けて立つ集団の凝固度の間のバランスによっては、集団内のモラルが昂められた。即ち、集団の成員各個には、迫害に耐える心理が準備され、或場合には挑戦的にすらなりえた。高田は、説教所内の者と謀って、各人の家紋を十字架で囲み、大津の町を闊歩した

(近松 Opc. 報告「声」昭和11年10月p. 35)。此は、県庁所在地として近代都市へ移行しつつあった大津なればこそ可能だったのであろう。集団の成員は、強い連帯感で結びつけられ、「顔を見合す事のみにてても一種の感激であった」(「彦史」p. 9)。かかる場合、成員による集団の志向価値実現への意態も積極的であった。内部的には、文盲の婦人が仮名より始めて遂に馬太伝の輪読会を開始する等の知識欲となり(七一雑報3~49)、舟便しかない時代に「基督教の演説といえ、ば、団体を組んで(彦根から)京都迄乗り出して行」く熱意となった(「彦史」p. 8)。対外部活動としては、中島・樋口等の聖書研究会・講習会・長浜出張医療伝道などが挙げられる。

第4に、基督教団が、新たに形成された複数の信徒の家より構成されていた事実も、初期においては集団のモラルを昂めた。此の構成は、結果的にそうなったものであるが、家長が求道者であり、且つ彼の迫害に耐えるという強い価値実現への志向の二つの条件が合致した時にのみ信徒の家が形成を開始するのである。故に集団規模拡大の可能性は、此の条件のみでは極めて小であった(例えば、明十社が彦根教会に転身する時の伏況を見られたい)。又、家は、信仰の保護框となると同時に、信仰を制度化せしめる危険性のある点については、別の箇所指摘した(森岡編 Opc. 後篇参照)。

上の4つの条件の絡み合いは、個々の事例によって多少差異がみられるが、一応次の順序で顕在化して来た模様である。最初基督教の集會に「新知識」を求めて集って来た人々が、西欧文明への好奇心より更に進んで宗教そのものに迄接近するには、之を説き又は支持する高潔な人格を媒介とする事が多かった。教会が、「文明」を地域教会にバラまくセンターから、一步一步宣教団体の性格を明らかにしてゆくにつれ、文化の中心から周辺に押し流され、外部社会の圧力も加速度的に加って来た。此の圧力は、集団の成員の淘汰作用をもち、集団内には、地域社会から疎隔された者同志が支え合う、反社会集団特有の強い連帯意識が醸成されて行った。外部社会へのより以上の拡大は困難であった為、信仰は、初期に信徒を生み出した家の他の成員に滲透し、之に他地で信仰を得た移住者層が加って教会を

構成したのであった。

前述の条件の反面が持つ性質が併行的に顕在化して基督教団の停滞をもたらした。以下その点について考察する。

第1の「新知識」を求めて来た者は、それが文明に対するものであれ、宗教に対するものであれ、好奇心が満足されると離脱してゆくのは当然である。前述高田の如き、「西洋心酔は終生継続した」(近松 Opc. p. 131)にもかわらず、16年8月八幡復帰以後は、基督教の伝道に全然協力を示さなかった。

第2の「人格」という条件は、その人格の喪失と求道者の求道生活の停止とが併行しないためには、より高度の信仰に止揚される必要があった。然し、必ずしも先分な信仰訓練が施されなかったので、信仰の内面化には稍不十分な面がなくはなかった。一例を挙げるならば、22年11月中旬の長浜教会リバイバルは、

「……或は今迄ひそかに嗜み居りし煙草を止めて基金額を岡山孤児院に義捐すべしと云ふもの有云々」(基督教新聞332号)

「姦淫を絶つ能はざるもの……飲酒・喫煙に流るるもの……号泣して罪を謝し、神の救ひを求めたり」(Opc.339号・下線引用者)

といった景況であった。仮令特に指摘がなくとも、かかる高潮した集会で告白し得るのは、中心的な指導者に限られるから、有力信徒にして尚倫理面にかかる脆弱性を残していた。即ち、教会で表向きに禁じられていた規範が、私生活の規範に迄昂められていなかったのであるから、基督教の倫理を社会に適用し、組織化された社会運動を展開しうる筈はなかった。個人的な社会奉仕の美談は残っているが、何れも散発的であり、漸く26年3月25日に彦根教会が計画した「日本開国以来初めて」の江州における魔娼演説会も、前節で述べた如き事情から唯一度で挫折した(Opc.505号)。

第3に、集団の外縁が明確化されると、成員の増加が急速に抑制され、やがて教会の経済的基礎が危機に見舞れた。伝道活動は支障を来し、財政面の鉅寄せは凡て牧師の俸給に現われた。長浜教会の事例に徴して云うな

らば、演説会開催の資金は牧師の俸給の一部（2～3割）が充てられ、八幡講義所の如きも、伝道会社の援助を絶たれた際、牧師の俸給を削除した。彦根教会では、俸給の問題を廻って牧師と信徒との間に緊張が生じた事す

第6表 明治年間滋賀県主要教会教師一覧

彦根教会		長浜教会		大津教会		八幡教会	
氏名	任期	氏名	任期	氏名	任期	氏名	任期
本間重慶	12.6～16.6	堀 貞一	17.9～22.1	亀山 昇	23.7～?	須田明忠	13～14
西尾文貞	18.7～20.9	竹内甚吉	22.8～23.4	?		宮川友之助	21.8～22.4
堀 貞一	20.10～22.6	内田政雄	23.6～25.7	山田兵助	38～40.6	新野 稔	22.7-24.12
園田重賢	22.9～24.3	山田良齊	25.11～26.12	青木知美	40.7～40.9	村田平三	24.12-28.7
兼子常五郎	25.1～26.4	柏田弥三郎	27.7-28.11	辻密太郎	40.10-41.4	岩村加次郎	28.9-28.10
宇田川竹熊	26.7-29.12	伊藤勝義(兼)	29.7～41.7	今泉真幸	40.12-41.4	浜田乙磨(兼)	28.12-37.9
森山寅之助	30.6～38.7	森山寅之助	35.5～36.6	白石矢一郎	41.4-42.12	森山寅之助	37.11-38.6
大橋五男	38.8～39.4	榎本 修	41.7～42.3	村上太五平	43.1～2.10	深尾りく	37.11-38.8
園田重賢	39.6～44.3	太田六郎兵衛	42.7～43.3			大橋五男	38.6-41.11
武田猪平	44.6-4.4.12	横田格之助	43.4～?			宮森武次郎	大正 41.11～1.8

らあった。従って、県下各教会とも、牧師の交替が目まぐるしく（第6表）、無牧兼牧の期間が継続し、信徒の徹底的な信仰の養成にあたる事は困難となった。それに対応して、信徒は一層不熱心になるという悪循環が起った。

第4の、信仰の制度化は、江州でも観察される点を附記しておく。このように、一つ一つの集団形成の条件が、同じ条件の反対面によって疎害要因に転化し、基督教団の教勢は停滞した。

以上を要約すると、殊に明治前期近江における真宗教団との対決は、単なる教団の宣教活動における優劣ではなく、成立基盤の相異によって真宗教団の圧勝に終わった。之が基督教新聞260号附録にみられる、10年代近江プロテスタント伝道不振として現象したのである。この基盤の上に、「はしがき」に少しくふれた近江兄弟社の発展を載せてみる時、驚きの感に打たれる。本稿につづくべき近江兄弟社の展開過程の分析は、その答を見出

さんとする一つの試みなのである。

(1961. 8. 27)

Confrontation of the Shin-Sect of Buddhism and the Christian Church in Omi (Shiga Prefecture)

By Mitsuru Shimpo

As is well known, in the district where Shin-Sect Buddhism had power, expansion of the Christian church was extremely difficult. Especially in the Meiji Period, the Shin-Sect developed a polemical anti-Christian movement. This paper intends to analyze the situation in Omi.

The anti-Christian movement was performed by means of organization based on an hierarchical system of main temple, branch temple and laymen. The first method they used was to enlighten people through pamphlets or lectures. Secondly, the Shin-Sect priests tried to take advantage of the traditional anti-Christian prejudice when they oriented laymen to be loyal to the main temple. For that purpose, Meiji priests tried to reorganize the lay community. Any individual or family who was related to Christianity was expelled from that community.

The Christian church which did not possess such a powerful organization as the Shin-Sect, also had certain favorable conditions helping its expansion even though the members were mostly immigrants from the outer community. First of all, the church introduced new Western civilization which attracted people, but as soon as their curiosity was satisfied, they ran away. Secondly, the respectful character of the converts attracted people, but as such people, being often aged ones or immigrants, would soon died or transferred, the unity of the group became weak. Thirdly, as the church clarified its nature as a religious institution so those not in sympathy with its religious basis disappeared. Social pressure from outside elevated the morale of the group members. However, a heavy financial burden was imposed upon a limited membership and this tended to plunge the church into recurrent financial crises. These factors, which were closely related together assisted the initial formation of a church, but, after a certain period, also contributed to the difficulties of the church.

Thus the confrontation of these two religious organizations resulted in the success of the Shin-Sect not because of the superiority of either religion as such but because of a difference in their social basis.